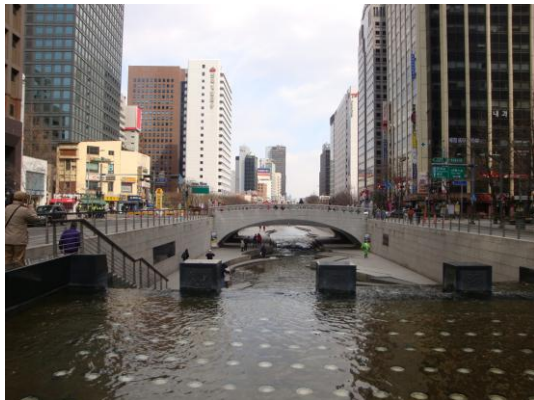



0. 報告日：2012年 4月 5日（木）	
1. 訪韓期間と場所：2012年3月25日（日）～3月31日（日），韓国：ソウル・江陵等	
資料作成者	<p>（所属，学年） 大分大学大学院工学研究科 建設工学専攻博士前期課程1年 （氏名） 松本 彩花</p> <p>2. 交流・調査の着眼点 これまで卒業論文のテーマとして，地区の景観形成の方針について研究を進めた。そこで今回は，日本と韓国の景観認識の相違点に着目し，景観形成の在り方について考察を進める。</p>
3. 調査記録	
<p>■ 2012/3/25 ソウル市：清溪川，北村，景福宮，南山タワー</p> <p>[清溪川]</p> <p>文化の基盤としての役割を果たしている清溪川の始点である清溪広場周辺の調査を行った。広場と水辺空間から構成されており，この広場を利用する市民が多く，コミュニティ空間が形成されていた（写真1）。また，水辺空間の滝は，川の水の流れをつくりだすだけではなく，ソウル市の街の流れも生み出していると感じた。この地区の景観に関する規制は，「建築物の高さ」や「看板のサイズ」の制限が設けられている（写真2）。しかし，国の面積が小さく，さらにソウル市は首都圏であるため，高層ビルが多く，どの場所を歩いても圧迫感があった。また，日本では「色彩」の制限を設けている事例が多く見られるが，この地区には設けられていなかった。これは，日本と韓国の「色彩」についての認識が異なるためだと考えられる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>写真1：清溪川（水辺空間）</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>写真2：清溪川（看板等）</p> </div> </div> <p>[北村]</p> <p>景福宮と昌徳宮の間にあるこの町は，韓国の伝統的な建築様式の家屋である韓屋が密集して存在している。この町は路地が多く，人が一人通れる程の幅しかないものから牛や馬が通れるくらいの幅広い路地まで様々である。この町を見学する観光客が多く，住民が普段この路地空間をどのように利用しているのか様子を伺うことはできなかった。おそらく，この路地空間は人々の憩いの場として機能しており，地区住民と密接な関係</p>	

があると考え。また、この地区の韓屋に使用している材料やデザインが統一されていることも調査でわかった。壁面には石や煉瓦を施してあるものが多く見られた（写真3）。日本の場合、「建築物の壁面」は、大半のものが漆喰やモルタル吹付けのみであるが、韓国の場合は石と漆喰の両方を使用しているもの等が見られた。また、色彩の印象としては暖色系が多いと感じた。写真4からわかるように、伝統的な建築様式の建築物は減少しており、「屋根素材・形状」も現代のものとは大きく違い瓦屋根のものはあまり見られなかった。



写真4：北村



写真3：韓屋（北村）

[景福宮]

朝鮮王朝を代表する宮殿であり、ハングルが生み出された場所でもある。景福宮は、風水思想を取り入れた配置となっており、王が住む空間であるため最大の規模で最高の技術が要求された。景福宮にある建築物は、全て規模が大きく緑と赤を基調としていた。水辺に浮かぶ建築物（写真5）は、当時宴を行った場所である。水辺に建てられているため、夜ライトアップされたらとても美しく、楽しい空間だと感じられた。また、この町は山に囲まれており、良い気が流れ込むように考えられているため、心地よい空間を生み出しているのではないだろうか。

[南山タワー]

南山タワー内には、世界一早いエレベータが設置されている。また、タワーからソウル市内の町並みが一望することができた。季節も関係しているだろうが、全体的に緑が少なく感じた。さらに、高層ビルが密集して存在する場所が多く、また学校の緑も少なく感じた。近代的な建築物等を建設する一方ではなく、都市環境に配慮した街づくりを

しなければ、今後都市の発展は難しいのではないだろうか。



写真5：景福宮

■2012/3/26 ソウル市, 江陵市：ソウルまちなみ景観調査, COEX, I park, タワーパレス
[ソウルまちなみ景観調査]



写真6：まちなみ景観

建築物の高さは、高さ制限があるため一定の高さにそろえられていた。カーテンウォールの高層ビルが多く、町表情の変化があまり見られなかった。高層ビルの中には曲線を使用しているものもあった。また、歩道が日本と比較して広く、路上駐車をしている車も多く見られた。韓国の交通ルール等を把握できていないので、路上駐車が多い等の問題が生じているのか正確なことは述べることができないが、駐車場をあまり見かけなかったことも関係しているのではないだろうか。日本にも言えることであるが、都市部は地方と比較して交通の便も良く、さらに韓国はバス交通が発展しているので、その点は、日本も参考にできる部分もあるのではないだろうか。

[COEX]

COEXは1979年に設立されて以来、国際展示や国際会議、文化・芸術行事などが数多く行われているコンベンションセンターである。2000年以降、様々な施設が建設され、現在は地上4階から地下4階までの韓国最大の巨大複合施設となった。今回は、サミットが行われていたため近くで見学することはできなかったが、その規模に圧倒された。次回は、建物の中に入って動線の処理の仕方等を見学したい。

[I park]

高級住宅地にあり、一部屋3億円もするそうだが、外観は普通の高層ビルと変わらないが、セキュリティが厳重であることと層が高くなっていることは異なっていた。

[タワーパレス]

河川の計画が後付けなのではないかと感じた。ただ、緑を設ければ都市環境が良くなるのではなく、この地区にあった計画をしなければ、このような寂しい景観になる。



写真7 COEX



写真8 I park



写真9 タワーパレス

- 2012/3/27 江陵市：江陵原州大学校（研究交流）、鏡浦臺、市役所（緑の都市づくり計画について）、烏竹軒、船橋荘

江陵原州大学校では、英語で卒業研究の成果報告を行い、先方の大学生、大学院生、教員等との研究交流を行った。英語でプレゼンテーションを行ったため、大学校の方々にどの程度研究内容をご理解頂けたか不安が残った。これにより英語力の向上に努める必要性を再確認した。

[鏡浦臺]

韓国式の家屋でもっとも多く使用される屋根の形である八作屋根の大きな東屋である。また、地方有形文化財第6号に指定されており、正面6間、側面5間、柱28本からできていた。また、派手な装飾が目立った。景福宮と色使いが似ている。日本では、沖繩と形態意匠が似たようにも感じた。



写真10：鏡浦臺

[烏竹軒]

黒竹が多く生えていることから烏竹軒と名前がつけられており、韓国の住宅建築の中でも最も古い木造建築物である。また、5000ウォン紙幣の裏に描かれているのも烏竹軒である。日本の住宅建築と異なる点は、韓国はオンドルを使用するので、煙突が設けられていることだ。烏竹軒は、ソウル市で見られた韓屋と比較すると色彩は落ち着いており、さらに壁面素材も韓屋は煉瓦や石を使用しているものが多く見られたが、烏竹軒は漆喰のみであった。



写真11：さるすべり



写真 12：烏竹軒

[船橋荘]

両班の住宅であり、韓国でもとても珍しい建築物である。全体的な印象としては、自然と調和していると感じた。韓国の住宅の前の広場には、普通は樹木等を植えることはないそうだが、当時ここには客人をもてなすために特別に植えたそうだ。また、位の高さを建物の入口の位置の高さによって区別している。また、入口も女性用と男性用に区別されていた。茅葺き屋根の建築物もあって、日本の建築物と似ている部分もあった。



写真 13：船橋荘

■2012/3/28 太白市，安東市：太白山，三亀亭，屏山書院

太白市では、太白山にて緑地景観の調査を行ったところ、日本とは異なり緑の密度が低いことがわかった。これは気候により生えてくる植物の種類が異なることも関係しているといえる。このことにより、国特有の緑の景観が創造されるということが調査により明らかとなった。

[三亀亭]

安東一族が代々住んできた集落であり、長寿の象徴である亀の模様が三つあることから三亀亭と名付けられたそうだ。正面3間，側面2間となっており，亭の周りは樹林帯であり，さらに亭のそばには大きな樹木が植えられており，亭を守っているように感じた。日本とは違い，何か建設する際は風水に基づいた配置を考慮していると確認できた。



写真 14：三亀亭

■2012/3/29 安東市，太田市：河回マウル，屏山書院，俗離山法住寺

[河回マウル]

河回マウルは、世界文化遺産に登録されており、両班という貴族階級の人々が代々生活している同姓村の集落である。この集落にある全ての住宅に共通した配置が、右手が男性の部屋，左手の隠れた部分が女性の部屋となっている。さらに、少し段が下がった部屋が使いの者の部屋で，その隣には馬小屋が配置されている。昔は，男女で部屋の区別等がされており，日本でもそういう時代があったのでそういう風習はどうして生まれ

てしまうのか疑問を感じた。また、このように部屋の配置等から当時の思想を知り、造った人の心情に近づくことができる場所も建築の面白さではないだろうか。現在もこの村で生活が営まれているので、伝統生活文化や古建築様式を受け継いだ景観を望むことができた。この集落は、現在、本研究室で研究を進めている文化的景観の性質と類似しているものと推測することができ、この集落の保全方法を文化的景観の保全方法の参考にすることが可能だと考えられる。



写真 13：河回マウル

[屏山書院]

日本では、外から建物を見て楽しむというのが一般的であるが、屏山書院は、建築物の中から外の景観を楽しむ造りとなっているということを知り、建物の見方や空間の造り方に新たな知見をえることができた。この建物は、風通しが良くとても気持ちの良い空間であった。この空間にいと屏山書院で学習していた学生たちが学習している情景や休んでいる情景が目浮かぶようであった。山と川があって、そして木々に囲まれているからこそ屏山書院には気持ちの良い空間が生まれるのではないだろうか。また、先生と生徒の関係が厳格なものとなっていることも建物の高さが変化していることからわかる。



写真 14：屏山書院

[俗離山法住寺]

韓国八景の一つである俗離山には俗離山法住寺が存在し、広大な敷地の中に青銅弥勒大仏があり、世界最大を誇る。参道から天王門まで歩く途中、参道は木々に囲まれており、川のせせらぎが聞こえてくる。さらに、法住寺は自然に囲まれているため、安らかな気分になれる場所であった。また、韓国の国宝であり唯一の木造の五重塔である八相殿も存在している。日本の五重塔と類似しているが、全体像が横に幅広く装飾や色遣い

は日本のものと比較すると派手であった。ある一つの建物には天国と地獄の絵図が描かれており、とても興味深いものであった。

7日間、韓国内の様々な地域の伝統的な建築物を調査してきて一貫して言えることは、ある時期もしくは位の高い人が使用する建物には「赤・緑・青」系の色が使用されていると考えられる。これは、建物を豪華にするために使用したのか、何かこの色にする意味があってこの色を使用しているのかどうか定かではなが、7日間の調査により考えられた。



写真 14：屏山書院

■2012/3/30 太田市，釜山市：ハンバット大学校（研究交流）

英語で卒業研究の成果報告を行い，先方の大学生，大学院生，教員，研究員等との研究交流を行った。学生から頂いたご意見から景観研究が今後どのように対象地区等に貢献できるのか，コンパクトシティとの関係について今後考察していく必要性を確認することができ，とても有意義な研究会となった。ハンバット大学校の学生は，日本語を第二外国語として学習しているため，日本語がとても上手で，私自身も海外の方々とコミュニケーションをもっと積極的にとるために英語力の向上をはかる必要があると再確認した。

■2012/3/31 釜山市：I park シネマ

釜山市は，ソウル市に次ぐ都市であるため，高層ビルが数多く建設されていた。また，



写真 15：ヌリマル

ソウル市と比較するとカラフルな色彩の住宅が多く見られ、それらの住宅群は山に存在していた。また、APECの会場であった所も見学したところ、そばには亭がもうけられていた。この場所は潮の香りと海風等とても気持ちが良い場所で気持ちよく会議が行えたのではないだろうか。

さらに、釜山市は港町であるため海辺の近くには港町特有の市場等の景観が望むことができた。周辺の市場は、観光客が多く活気に満ちあふれていた。一方で道路整備が行き届いていないのが目に留まった。



写真 16 : I park

4. 全体の感想と今後の抱負

韓国を訪れて感じたことは、建築物等の「高さ」や「形態意匠」が揃えられているからといって、その都市の景観が良いかと言われれば必ずしも良い景観が創造されるというわけではなく、やはりその都市にあった「高さ」や「形態意匠」であるから「良い景観」と感じることができるのではないだろうか。実際に、都市に足を運び時間をかけて調査をしなければ、その都市の「景観の良さ」や「都市の良さ」等の本質に迫ることができずと感じた。また、国によって「良い」と感じるもの等の価値観の差は生じてしまうものであることも実感することができた。例えば、ある国では成功している事業や計画等を自国で適用した場合、必ずしもその事業や計画等が成功するとは限らない。つまり、「良い」と感じるものを何の工夫もせずそのまま適用するのではなく、どうしてその事業や計画等がその国では成功したのか、また自国で適用する場合にはどういった点に留意して事例を参考にすべきか等を考える必要があると、改めて感じることもできるとても有意義な研修となった。今後は、この研修でえた都市に対する思考や経験等を活かして研究活動等を進めたいと考える。また、研究活動等を進めていく際にどういった視点で考察を進めるのかにも注意したいと思う。